

明石市は15日、大地震発生を想定した聴覚障害者の防災訓練を同市貴崎1の市立総合福祉センターで実施した。聴覚障害者10人を含む約40人が参加。発生から避難までの安全行動を確認

阪神大震災

21年

するとともに、健常者とは異なる「コミュニケーション」の取り方を参加者自身が考えた。聴覚障害者を対象にした訓練は同市では初で、全国的にも珍しいという。【駒崎秀樹】

明石 聴覚障害者対象に防災訓練



聴覚障害者防災訓練で手話通訳者の身ぶり手ぶりを見ながら安全行動を取る参加者 —明石市立総合福祉センターで

助け合い命を守る

同市は昨年4月、手話言語 施された。

条例を施行し、聴覚障害者らのコミュニケーション手段促進に積極的に取り組んでい。訓練は午前10時、地域住民のコミュニケーション手段促進と聴覚障害者が自治会集会所で集会中に大規模地震が発生。訓練はその一環として実施した想定で開始。スタッフに

手話や要約筆記交え状況伝達

ター多目的室に避難した。

訓練終了後に参加者全員で訓練を振り返り、感想や注意点を述べた。聴覚障害者からは「支援者が誰か分からないので、旗などがあると付いて行けると思った」「とっさに筆記が無理な時は身ぶりや簡単な絵を描くことで表現できるのではないか」などの意見が出た。市の担当者は「一人一人になってしまっても諦めず、『分からない、助けて』という意思を周囲に、物をたたいたり通常使わない身ぶりをしたりして伝えてほしい。それが命を守ることにつながる」などと説明していた。

よる「ゆれています」の表示を合図に、机の下に潜り込み、通訳者が手話や要約筆記で状況を知らせた。5分後に「ゆれが止まりました」の表示が出ると、地域住民役の市職員が「支援者」として誘導し、駐車場に一時避難。さらに小学校避難所に見立てた同セン